

No. 56

2006年3月1日発行

宇治市中央図書館
〒611-0023 宇治市折居台1-1
0774 (39) 9256

宇治市東宇治図書館
〒611-0011 宇治市五ヶ庄三番割36-5
0774 (39) 9182

宇治市西宇治図書館
〒611-0042 宇治市小倉町山際63-1
西小倉地域福祉センター3階
0774 (39) 9226

と し よ か ん 宇 治

第2回 民話発表会



民話の語りの活動

宇治・山城の民話を語り継ぐ

宇治の語り部「かわせみ」代表 松山 一三

私達は平成十四年、宇治市中央図書館主催の「宇治の民話を語る語り部ボランティア養成講座」の開催を知り、応募をしました。申込者は全部で三十八名。講師は大野由美先生で、一回目は五月、二回目は七月から始まり、八月に二回目の講座が終了しました。その後、九月に受講生全員が初顔合わせをし、サークル名を検討することになりました。その結果、宇治市の鳥「かわせみ」にちなんで、宇治の語り部「かわせみ」と決定し、図書館のボランティアサークルとして正式に発足したのです。

民話を語るためには、最初の段階では講師を依頼して勉強会を行うことがどうしても必要です。そこで、民話の勉強会として宇治市生涯学習センターの「まなびチャレンジ奨励事業」に申請し、二度にわたって承認をいただきました。大野由美先生と斎藤寿始子先生のご指導をいただき、民話を語ることについての理解が深まった気がします。講義を終えて会員の方々も何か自信がついたようで、その後の発表会は「ゆめりあうじ」に場所を移し、幸いにしてこれまで多くの方々に来てくれています。また、その後、北川喜美子先生からも語りについての指導を受け、民話発表会は今年三月開催予定が六回目となります。

発表会の最大の目的は、「宇治山城の民話」をたくさんの方に知っていただくことと話者（語り手）が民話を勉強する（覚える）ことなのです。民話発祥の地を探訪し感性に磨きをと、努力もしています。

現在の活動は、高齢者施設四ヶ所と幼稚園一ヶ所を定期的に訪問し、民話を語っています。小さな子どもさんに宇治・山城の民話は難しいのではないのか、そんな意見もありまして、全国各地のよく知られている昔話も時には語ります。民話を絵にする、皆で歌を歌う、指体操でリラックスマスなど、楽しい時間を民話と共に過ごせる工夫も必要だと考え、実施しています。

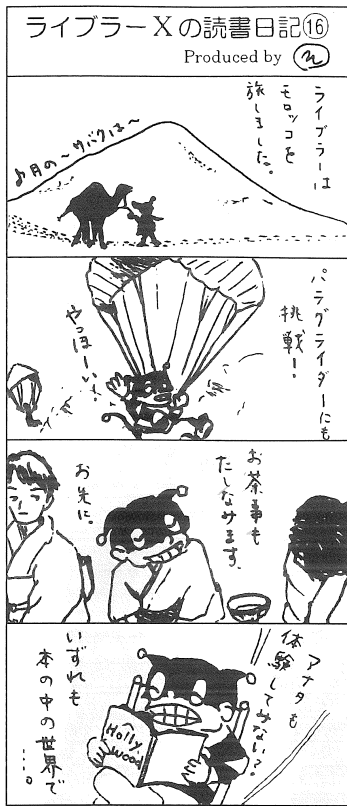
宇治・山城に残る数多くの民話は、これからも次の世代へと語り継いでいくことが必要です。そのため、私達はこれからも会員一丸となり、各町内のイベントへの要請など民話の出前に出向き、笑顔で頑張る「かわせみ」会員でありたいと思っています。優しい心で強きを挫き、弱きを助ける民話の世界、耳で観る紙芝居となるような語りや夢のまた夢です。

クイズ 著者はだれでしょう!

- ① 元上野動物園園長。「動物と人間」など著作多数。わかりやすく動物の生態、人と動物の関係を話される。
- ② 「愛深き淵より」「かぎりなくやさしい花々」などの詩画集多数。手足は不自由だが、口に筆をくわえて執筆。
- ③ 化学物質による環境や生物への影響を告発した「沈黙の春」の著者。今日でも環境を考える原点といえる本。
- ④ 「日本植物図鑑」など多数。全国を採集に明け暮れる生涯で、命名した植物二千五百種。日本植物学の父。
- ⑤ 夫の位里さんと被爆直後の広島 of 廃墟とそこで見た風景を「原爆の図」として描く。「ひろしまのピカ」など。

- ⑥ 棟梁として法隆寺や薬師寺の復興に多大の功績を残す。最後の宮大工といわれる。「法隆寺を支えた木」など。
- ⑦ 幼くして失明。十代で点字図書に出会い読書の喜びを知り、生涯を点字図書の普及に費やす。日本点字図書館を創設。「指と耳で読む」など。
- ⑧ 言語学の第一人者で、多くの辞典編纂にあたる。日本語の豊かさを軽妙な語り口で語った。「日本語」など。
- ⑨ 地位や賞を拒否、紀州田辺で学問に打ち込んだ大博物学者。天才とも奇人とも。「十二支考」や全集など。
- ⑩ 書・絵画・陶芸などの美の頂点を求め、美食を追求するなどスケールの大きな人物。「料理王国」など。

※答えはこのページの左下にあります。



★読書ライフを楽しもう!

名は残さない生き方 を読んで

師走の某新聞で、文化人類学者の片倉もとこさんの文章を読みました。『「珠玉のような作品を残して名はのこさない」という生き方もいいなあ!東京のはずれの美術館で、明清時代の絵画と書を見て、そう思った。作者名不明、生没年不詳の作家の作品に、こころを吸いこんでしまふようなものが多かった。……』

私たちは、名をなそうとは思いませんが、自分の仕事を精一杯努力して成果をあげたいと願っています。仕事に対する情熱は、それはどんな職業職種であっても同様だと思いません。真面目にこつこつと努力を積み重ねることが必ずしも認められるとは限らないし成果をあげられない場合だってあるでしょうが、努力して仕事をしたことは必ず何かの形で残っていると思います。右の片倉さんの文章では、それは絵画・書に作者の気持ちがあらわれているのでしょう。

上段のクイズで取り上げた著者は現役で活躍されている方もおられますが、結果として名を残した人たち

です。彼らの著作はベストセラーではありませんが、各分野の第一線で活躍されたその「こころ」が伝わってくる名著だといえます。

今日、内容の希薄な本や、視覚に訴えるような本が多くなっています。そんな時代だからこそ、図書館で働く私たちにとって最も重要な仕事は、どのような資料を揃えて五年後・十年後の図書館をつくるのかということだと思えます。いつまでも読み継がれ、時代を越えて語り継がれるような図書を選びたいと思うし、それが私たちの一番大事な、また必要なお仕事だと思います。数字として表に出ることもないし、地味な仕事ですが、この積み重ねが明日の図書館を作っていると思えます。

片倉さんの文章は次のように締めくくられています。

『……人のこころを動かす作品や行為を残して、ひそかにあの世に旅立つというのは美しいなと思う』

- ① 増井光子
- ② 星野富弘
- ③ レイチェル・カーソン
- ④ 牧野富太郎
- ⑤ 丸木 俊
- ⑥ 西岡常一
- ⑦ 本間一夫
- ⑧ 金田一春彦
- ⑨ 南方熊楠
- ⑩ 北大路魯山人

図書館へようこそ

利用者にインタビュー

第 42 回

吉岡佐代美さん



木幡に住む吉岡佐代美さんは「いわさきさよみ」のペンネームで挿絵を描き、絵本を出版されています。図書館では、吉岡さんの三作品（下記参照）を読むことができます。

*おはなしはどのように作られたのですか。

ひとつは養護学校で教師をしていたときに体験したこと。今はと

きどき、障害者のための作業所でお手伝いさせてもらっています。もうひとつは、自然をテーマにしています。自然に親しんだ世代として、子ども達へのメッセージとしました。私自身、子どもが小さかったときはよく家族で山に行きました。

*今も山登りを？

子どもは、高校生ぐらいになると、お母さんお父さん二人で行ってと言いました（笑）。退職後、体作りにと山の会に入りました。

*吉岡さんは、月二回、中央図書館の集会所で絵本の勉強をしている「ぐるんぱ」のメンバーです。

図書館に行くと、真っ先に児童書コーナーに足が向きます。気持ちがほっとします。この一年は親の介護があったりと忙しく、なかなか自分のやりたい事ができませんでした。そんな時、バイクをとばして図書館に行き、本にふれると気持ち落ち着きます。現実の生活は厳しく苦しいことも多いですが、児童書の

世界では、困難を乗り越える主人公が描かれていて救われます。読むと元気になるんです。大人が読んで癒されます。子ども達には本を読んで、未来に希望をもって育ってほしいです。

*吉岡さんも、お子さんが小さかったときには読み聞かせをしておられましたか。

いえいえ。私が夕食を作る間、夫が子どもに読んでくれていました。私にとっては、家族で山登りやいろんな所へ行ったことが思い出です。絵本も親子の絆を強める方法のひとつでしょう。昔、親に読んでもらった記憶のある子は、大きくなって親を軽んじるようなことはない、私は思います。

吉岡さん、ありがとうございます。インタビューの後、写真を撮りました。レンズの中の吉岡さんの笑顔が、吉岡さんの描く子どもの笑顔とそっくり！と思いました。



△図書館で読める
吉岡佐代美さんの作品▽

- 「けんたのかきの木」
いわさき さよみ 作・絵
けやき書房
- 「パッチン・ぐるんぱ」
いわさき さよみ 作・絵
けやき書房
- 「みんなのたんぼぼがっきゅう」
赤松まさえ 作
いわさきさよみ 絵
けやき書房

本棚の中の宇治

清河八郎

『西遊草』

安政二年（一八五五）五月四日、母親を一生に一度の伊勢参りに連れ出した孝行息子の一行が宇治をおとずれる。茶商にたちより宇治茶を味わい、平等院で源頼政の故事に思いをはせたのち、宇治川畔「きく屋といふ綺麗なる家」に宿をとった。

宇治川の流れを眼下にのぞみ、景色ことにうるはしく、快然として近頃まれなる興なり。故に酒をよび、宇治川の魚をくらひ、且茶食などを命じて、をもしろくたのしみ

と記すように、この地の風光は長旅の疲れをいやす一服の清涼剤となったようだ。

彼等が、奥州鶴岡城下（山形県鶴岡市）を出立したのが三月二十一日。五月一日には無事目的の参宮を終える。当地をおとずれたのは、奈良を経て京都へ向かう途中。

翌五日の藤森社の祭礼行列を楽しみに急いでやってきたのである。聞いてみると宇治でも県明神の祭りだという。「小社なれども明日祭礼にて大坂・京迎より群集なすとぞ」これ以上の具体的な記述はないものの、現在六月四日に行われている県祭りが、当時すでにかなりのにぎわいを見せていたことがうかがえる。

この後、一行は大坂を経て讃岐の金毘羅さん・安芸の宮島・丹後は天橋立まで足を伸ばし、再び大坂・京・江戸を経て帰郷したのは九月十日。半年におよぶ大旅行であった。彼らが旅の途上で出会った人物や風景が活き活きと描かれ、江戸時代の旅の魅力がわれわれに教えてくれる好著である。また、一昨年のNHK大河ドラマ『新選組』でもそうであったように、八郎は権謀術数にたけた人物とのみ描かれがちだ。しかしながら、本書はそんな八郎の「意外」にも人間味あふれる魅力を伝えている。



大正時代の県神社

『西遊草』は、岩波文庫（一九九三年）と東洋文庫（一九六九年）におさめられている。前者は原文のまま、後者は現代語訳。宇治の部分については宇治文庫9『宇治の道 旅人と歩く』（平成十年宇治市歴史資料館）「七草 孝行息子の伊勢参り」でもくわしく紹介している。

利用案内

- ・市内に在住、または市内に通勤・通学されている方なら、貸出券を作ることので一人十冊三週間、本が借りられます。貸出券は全館共通です。図書館で借りた本は市内のどこの図書館へも返却することができます。
- ・図書館は九時から十七時まで開館しています。休館日は毎週月曜日、第四木曜日（いずれも祝日の場合は翌日）、祝日の翌日（土・日曜日の場合は平日に振替）、年末年始です。
- ・予約された本を市内四カ所の公共施設（木幡公民館、槇島コミュニティセンター、南宇治コミュニティセンター、開地域福祉センター）で受け取ることができます。毎週一回、木曜日の午後に搬送します。
- ・図書館で借りた本は公共施設へ返却することはできません。

あとかき

「宇治山城の民話」を読むと、この地域でも、面白く興味深い民話が数多く残っていることがよくわかります。宇治の語り部「かわせみ」の活動も四年目に入りました。この大切な「遺産」を、みなで次の時代の子どもたちへと語り継いでいきたいものです。